アンコールワットを求めて

十勝医師会
木野東クリニック
後藤幹裕（ごとうみきひろ）

近い将来、風化により失われるかもしれないと言われていた世界遺産、カンボジアのアンコールワット。

学生時代から憧れていて、2025年夏・夏季休暇、コロナ明けでもあり機が熟したと訪問を決意した。30年以上思いを馳せていた熱量を友人にぶつけると、４人が意気投合してくれて５名で当地を目指すこととなった。

2025年８月９日土曜午前診療終了後、帯広から午後最終便で羽田に向かい、深夜便でタイ・スワンナプーム国際空港を経てシェムリアップ・アンコール国際空港に到着したのは翌10日正午であった。

12日午後タイに戻るまでの２泊３日、アンコールワット観光は中日１日のみの弾丸観光の始まりである。（この時、帰路は陸路でカンボジア－タイ国境を超える計画を立てていたがちょうど２国間の紛争中であり、直前に空路に変更せざるを得なかった。）

いつも通りホテルだけ予約しただけの半バックパッカー状態での入国、空港から市内のホテルにどうやって行こうものかと考え始めたのもつかの間、全員で40ドルで送ってくれるという穏やかな表情のドライバーに出会い、お願いをした。

思えば若干危ない選択かもしれない、今後はきちんと信頼できそうなサイトで予約しよう。

およそ45km、１時間程度のたわいもない会話はほぼ英語で通じ、何よりその人柄に惚れて翌日のアンコールワットの１日観光を打診すると快諾をいただき、結局アンコール空港に戻るまでの送迎まで全てお願いすることとなった。

10日、到着した夜、遺跡群観光前日は現地料理を堪能。ハッピーアワーはビールジョッキ１杯50セント、なんと70円である。キンキンに冷えてはいるがコクのない薄い味が灼熱の田舎町によく合い、何度も乾杯を繰り返した。支払いはすべてドル払い、一皿２～３ドルの料理はつまみに最適で大変満足。その後カラオケに移動、なんとか見つけた日本のポップスを歌い合う帯広スタイルのまま夜は更けていった。

11日、アンコールワット１日観光である。20×20kmの範囲に大小600以上の遺跡が点在、アンコールワット寺院単体でもなんと東京ドーム約35個分の広さだとか。

朝８時に出発し、チケットセンターに行くまででかなりの距離を走り、つくづくいい出会いによって車をチャーターできた自分の幸運に安堵した。チケットには外縁に20個のスタンプ枠があったが、ドライバーによると１日では５カ所周れたらいいところだと教授いただいた。30度前後の中、アンコールワット寺院内を往復するだけで２時間弱を要し、アンコールトムともう１カ所の計３カ所周るのが中年～前期高齢者５名には精一杯であった。３カ所のみではあったがその壮大さは深く心に染み入るものであった。道中レンタルサイクル？で遺跡群内を移動する欧米人を数組目にし、メンバー全員で驚嘆の声を上げた。

どうにか熱中症にならずに夕刻ホテルに戻り、最後の夜は中心街のパブストリートで夕食をすることにして散策。高齢なイタリア人が経営するレストランに入り、赤ワインを開けて本格ピザを片手に話に花を咲かせ、なぜかアモックなどの地元クメール料理もあったのでこちらもテーブルに並べて食べあった、これが美味。札幌大通公園のビアガーデンがどこまでも続いているような賑やかな通りの一角で、友人と忘れ得ないひと時を過ごし、その後各々が好きなバーなどに散ってカンボジアの夜風を楽しんでいた。

カンボジアは胡椒が名産、またMAWSIM（マウシム）というブランドのクラフトジンがあることを友人に聞いていたこともあり、これらを購入しスーツケースに詰め込んで、短いアンコールワット観光のフィナーレを迎えた。

12日、２国間の紛争さえなければなかなかできない陸路での越境がかなったのにと残念な思いを胸に、空路でタイ・ドンムアン国際空港に行き、有名ビーチリゾートであるパタヤに移動、数日海を眺めながら、ゆっくりとした時間を過ごし、お盆休みはあっという間に過ぎ去っていった。

ドライバーを囲んで

イタリアンレストランにて